

相対主義の貧困 — 『テアイテトス』 169d-171d

渡辺 邦夫

風流の初やおくの田植うた

——芭蕉

プラトンの『テアイテトス』と『ソピステス』の二作品が一連のソフィスト批判、とくに最大のソフィスト、プロタゴラスの批判でもあることは、一般に承認される事柄であろう⁽¹⁾。この点で『テアイテトス』169d-171dにおいて展開される、「相対主義の自己論駁」と呼び慣わされている議論の解釈は、この時期のプラトンの哲学的構えを探るために不可欠の基礎作業であるとも言う。わたしは以下で若干の小さな観察群を記すことにより、この巨大な課題に自分なりに答える第一歩としたい。私見では、いわゆる「自己論駁」が成立するかどうかは、伝統的に解釈の場として前後の箇所から区切られる短いテキスト（171a6-c7）の文字面にかかわる形式的な観点からだけでは、決定できない。そして、プラトンもそのことを十分承知の上でこの箇所の議論を、記録として残していると思われる。かれが訴えたいのは、相対主義とソフィストたちの理論的構えの「不毛さ」であり、これをかれは、「真理」にかかわって理論を現実に構築してゆく、生身で、有限の資源しかない実践者としての一貫した視点から、述べている。かれの眼からは相対主義は、無限定に主張・考え方として誤っているというより、それ以前に、この主張に荷担する具体的人間が生活者として学問的な主張を立てはじめる、その「ポイント」「現実に下ろす錨」をもともと欠くという意味において、非生産的であり貧困なのである。なお、このようなプラトンの反相対主義的論点は、人類の諸種の間と諸文化の根元的多元性にかかわる最良の現代的視点とは、矛盾しない。むしろ、史上最初期の「他者論に値する人」ないし「気質的多元論者」としてのかれ⁽²⁾の、首尾一貫性と的確な自己認識を示すものであると思われる。

⁽¹⁾ 『ソピステス』についてこの点はまだ適切な程度浸透していないが、納富信留『ソフィストと哲学者の間』（名古屋大学出版会、2002年）のとくに第1章参照。

⁽²⁾ たとえば、『パイドン』115c-116aにおいてまもなく処刑されるソクラテスが、自分の埋葬の手配について自分に訊くクリトンは、魂の議論の初歩的理解にさえ反して今の境遇ゆえ自分を不当に差別している、とでも言っている内容を、クリトンとその場の仲間への友情あふれる勧告の中でオブラートに包んだことばや、あるいは『国家』V451c以下における女性論——それは北方ルネサンス期の、プラトンの誠実な読者であったトマス・モアによる女性教育の実践などをはじめの本格的なきっかけとして、現実に、「今に直結する世界」における女性の解放にもつながっている——や、さらにはまた『ティマイオス』21a-25dにおいて語られる、死滅した過去の文明への謙虚で美しいオマージュなどを見よ。

通常「相対主義の自己論駁」と称されるのは、以下のような段階を含む 171a-c の議論である。これを初めに示されるだれもが驚くにちがいない、いかにもあやしいステップに下線を施す。

- (1) プロタゴラスは、人間たちはつねに真を判断する、と考えている。
- (2) プロタゴラスは、(a) プロタゴラス自身にとっては、真を判断しているが、(b) 他の無数の者たちにとって、虚偽を判断している。
- (3) (1) より、プロタゴラスは、(2-b) のようにプロタゴラスが虚偽を判断していると他人が判断するとき、この他人の判断が真である、と容認する。
- (4) (3) より、プロタゴラスは、自分の見解が虚偽である、と容認する。 ゆえに(2-a)は棄却される⁽³⁾。
- (5) (2-b) および(4) より、プロタゴラスは、かれ自身を含むだれにとっても、虚偽を判断している。

相対主義の「自己」論駁というのだが、そのクライマックスに当たる「プロタゴラスは、自分の見解が虚偽である、と容認する」の部分は、ここの箇所に注意を集中した「論証」としての形式的観点からは、「あからさまな虚偽論法」によって「導出」されているようにみえるだろう。多くの解釈がいうように、(4)のこの主張を結論として導くべき(3)中の「プロタゴラスは自分の判断が虚偽だと他人が判断するとき、この他人の判断が真であると判断する」において、話者のソクラテスは、ほんらいプロタゴラスが慎重に次のようにいうはずの主張内容を「改竄」しているようにみえるからである。

- (3') プロタゴラスは、(2-b) のようにプロタゴラスが虚偽を判断していると他人が判断するとき、この他人の判断が、その人にとって真である、と容認する⁽⁴⁾。

ここからは(4)を導くことは出来ず、せいぜい

- (4') プロタゴラスは、自分の見解が他人にとって虚偽である、と容認する。

ことしか「帰結」しない。そして明らかにこの(4')は、プロタゴラスにとっては、「痛くも痒くもないこと」である。(4)の後半部分と(5)はいずれも、「論理的に帰結すること」

⁽³⁾ この部分はテキストに書かれていないが、次のステップのために理解されていると思われる。
⁽⁴⁾ Cf. J. McDowell, *Plato's Theaetetus*, Oxford 1973, p.170; M. F. Burnyeat, 'Protagoras and Self-Refutation in Plato's *Theaetetus*', *Philosophical Review* 85-2 (1976), 172-195, pp.173f.

ではなくなる・・・。

では、このような印象に基づいて、「相対主義の自己論駁」は惨めな失敗作である、というべきであろうか？ あるいは、相対主義憎しの思いのあまりプラトンが悔し紛れに書き残した「習作」「スケッチ」のごときである、と考へなければならぬのだろうか？ ——わたしはこの見解に与しない。私見ではプラトンはテキストに、わたしがかりに素描したここまでの話の展開を、はっきり予見していたとみなすべき証拠を残している。そして、もしプロタゴラスにとって、以上の結果がほんとうに「痛くも痒くもない」としたなら、そこにこそ、ほんとうの深刻な問題が隠れていると考へている。

プラトンが、ここまでわれわれがたどった解釈の筋をすべて見通していた証拠、とわたし考へるのは、「自己論駁」以前にその文脈と意義を定める、次のソクラテスのせりふである⁽⁵⁾。

ソクラテス それでは、われわれは、プロタゴラスさん、どのようにこの言論を用いたものでしょうか？ (i) 人間たちはつねに真を判断する、とわれわれは主張しましょうか、それとも、(ii) 或るときには真を判断し、或るときには虚偽を判断する、と主張しましょうか？ というのも、この[(i) (ii)] 双方の想定から、かれらがつねに真を判断するわけではなく、[真と偽の] 双方を判断することが、きっと帰結するからです。——因みに、お考へください、テオドロス、(A) プロタゴラスのもとにいた人々のだれかが、或いはあなた自身が「だれも、他の人が無知であり、虚偽を判断する、とは考へない」と確言しようとするかどうか。

テオドロス いいえ、そんなことは信じられないことです、ソクラテス。

ソクラテス (B) しかし、万物の尺度は人間である、と語る言論は、まさにそのところ(A)に、必然的にいたらざるを得ないのです⁽⁶⁾ (Καὶ μὴν εἰς τοῦτο γὰρ ἀνάγκη ὁ λόγος ἦκει)。 (170c-d)

このソクラテスのせりふに続けてテオドロスがソクラテスの真意を尋ね、そこからソクラテスが展開する議論のもっとも核心的な部分、もっとも精妙なこと (171a5 *κομψότατον*)

⁽⁵⁾ この箇所はD. Sedley, *The Midwife of Platonism*, Oxford 2004, pp.57f.でも重要な先行箇所として認知されているが、解釈自体は異なる。

⁽⁶⁾ *ἀνάγκη*が読みにくい、プラトンは仇の側の子を生んだ主人公に対するエウリピデス『アンドロマケ』170行のヘルミオネの、猛毒が塗りこめられたようなせりふ「そなたは、かくもものすごい阿呆さ(=無知)加減にまで墮ちてしまった (*εἰς τοῦτο δ' ἦκεις ἀμαθίας*)」が同時に読者の頭の中で響くように、読者の側で簡単に補える必要な前置詞を、故意に省いたように思われる (cf. *Apologia* 25e2)。

が、この解釈で問題とする、いわゆる「自己論駁」の議論である。したがって、「自己論駁の議論」は、上でみたようにわれわれの第一印象としては、失敗をいわば「上演」しているのだが、この表層にしたがった印象に直接的に反応して、あなたの議論は、多くの他者とプロタゴラスの「すれ違い」の状況しか描くことが出来ていない、プロタゴラスにとってこのすれ違いなど、痛くないと、もしも読者が原著者宛にいつてきたときには、プラトンはこの箇所を引くことができる。かれは、体系的にすれ違いしか起きないとするのは、効果として、引用箇所の問題になる葛藤・対立という事実の存在の否認と、おなじなので、プロタゴラスもその仲間も望まないはずなのに(A)、(B)まさにそうになってしまうということこそが問題なのだ、と答えることが可能である。

表面的に読むならばだれでも、プロタゴラスが、他者との完全なすれ違いという説明へと「逃げることができる」か否かを問題としたくなる。しかし私見では、じつはこの「プロタゴラス」には、設定上、「自己論駁の議論」以前のところから、「全面的すれ違い」を忌避するような、たいへん強い心理的ドライブがかかっている⁽⁷⁾。ここに引用した170c-dの箇所冒頭にある「どのようにこの言論を用いたもの (*Τί ... χρῆσόμεθα τῷ λόγῳ*) でしょうか？」(170c2)の「この言論」は、プロタゴラスのいう相対主義のテーゼ「それぞれの人にとって思われるものは、思われる当人にとってそうありもする (*τὸ δοκοῦν ἐκάστω τοῦτο καὶ εἶναί φησί που ᾧ δοκεῖ*)」(170a3-4)をさす⁽⁸⁾が、ここでこの言論を「用いる」とは、病気のときや海難のときのように、「知」ないし「知恵」と、「無知」のコントラストが、ほんとうにリアリティをもつ場面があることを、ソクラテスと対話相手のテオドロスが同意しあつた(170a-b)後、知恵を真の思考、無知を虚偽の判断と置き換えることも承認しあつて(170b8-9)、その上で、このコントラストを表現できるように当の言論を解釈する、ということだからである。他の答えならばとにかく、「完全なすれ違い」では、この文脈が与えているこの特殊な課題には、答えたことにならないのである。したがってわれわれのほうでも、この「自己論駁の議論」をそもそも「評価する目」を自分で形成するためには、何よりもまず、知恵と無知のコントラストのリアリティについて、さしあたりソクラテスとテオドロスが、そしてこの二人の想定ではこの場にはいないプロ

⁽⁷⁾ この一連の議論は後のアリストテレスの区別で、アポダイクシス(論証)というよりディアレクティケー(弁証)の性格が強いものである。このような区別は、プラトンでは直接には、『テアイテトス』の直前の『パルメニデス』第二部における、エレアのゼノンに倣った哲学的予備訓練としての弁証に端を発する。「弁証」は純粹に論理的な関係に基づくことなく、むしろ、あまりに原理的な場面であるために全面的に論理に基づくことは不可能な場合に使用されるのが適切である。そこでここでは、「心理的な働きかけ」も、合理的かつ説得的かつ「完全に手の内を明かしたフェアなもの」ならば、許容される。(ただしここで用いた論理と心理の二元的な語り方自体が、すでにプラトンとアリストテレスの目からは「雑駁すぎる」ものであろう。かれらの方法の意を汲んで、両者の中間に、対話=弁証的ないし実用論的な「縛り」の存在を承認すべきであるように思われる)

⁽⁸⁾ 直前 170a6-b10の「われわれ」ないし「人々」の説の内容ではなく、その前のプロタゴラスの「言論」(169e8 *τοῦ ἐκείνου λόγου*)をさすと考える。これは、CornfordとLevettとMcDowellという、もっとも信頼できる英語訳が、一致して採る解釈でもある。

タゴラスもまた、かれらとともに、同意できる最低限の内容とは何かということ、検討しなければならない。そのような検討さえ経るならば、私見では、以下で示すように、プロタゴラスも、通常の対話的な決まりを真摯に引き受けているかぎりでは、「自己論駁」という事態に立ち至っていることを承認せざるを得ないと判明することになるのである。

二

「自己論駁の議論」を含むワン・セットの大きな議論は、170aから始まっている。この大きな論脈全体を通じて、ソクラテスの論じ方には明確な特徴があり、それは、ある意見対立の起こる「思考の課題」のレベルと意味内容を、異論の余地がまったく出ないようにはっきり固定することにより、その特定の課題に対する「われわれ」もしくは多数者の答え方とプロタゴラスのほうの答え方を、課題ごとにていねいに対比させるというものである。これは、これ以前の箇所、単なる「状況証拠」やことばの気まぐれな「解釈」に基づくプロタゴラス「批判」の明白な不十分性（166a-168c, 168c-e, 169d-e）を踏まえて、新たに、完全に自覚的に採用された戦略なので、きわめて重要であると思われる。

(I)はじめの対立・葛藤場面は、知と判断の「社会的性格」に関するものである。プロタゴラスの側では、「それぞれの人にとって思われるものは、思われる当人にとってそうありもする」（170a3-4）と判断、思いの私的・非社会的性格に主張全体の根拠を置くのだが、これにぴたり照応するレベルの「われわれ（*ἡμεῖς*）」（a6）の側の主張としては、おなじく人の判断について、「或る事柄において自分が他人より知恵があり、別の事柄においては他人たちが自分よりも知恵がある、と考へない人などいない」（a7-9）という知の社会性の主張と、「知恵は真の思考であり、無知は虚偽の判断である」（b8-9）という補助的主張がある。組み合わせるならば、真偽評価の観点で見られるときにはわれわれの判断（*δόξα*）も、単に或ることが自分にどう思われるかということ（*δοκεῖν, δοξάζειν*）できえも、むろん私的なあるいは内的な何かでもあろうが、同時に、基本的に社会的脈絡の中にある事柄である、というのがこのソクラテスの申し立てる、「われわれの立場」である。——この場面がこの脈絡全体のはじめにくる理由は、明らかであるように思われる。相対主義を述べるプロタゴラスは、他ならずこの場面で反相対主義と「戦っている」がゆえに、ここでは文句なくかれの、生きた、もっとも真剣なことばを発していると思われ、したがってわれわれ評者の側でも、意に反して他の場面でならばプロタゴラスに「単に難癖を付ける」結果に陥るようには、このかれの主張を取り上げることが「揚げ足取り」になることは、まず、ありえないはずだからである。

(II)前節で引用した 170c-d のやりとりと、それに続く 170d-171a の一節において、自分が他人の判断をいかに真偽評価するかという問題に関する、やや入り組んだ諸論点が提出

される。私見では 170c-d の論点は次のように整理される。まず、ここでのプロタゴラスの思考の課題は、知恵と、知恵による「統率」をテーマとする、上の (I) 中の「われわれ」からの挑発に答えることとして固定されると思われる。病気の時に頼りになるのは素人でなく医者であり、知恵のある人である。海上で指示を仰ぎたいのは船や海や天候について専門的に詳しい人であろう。そのような場合に知っていることと知らないことの間には、はっきり違いがあり、差別がある。ゆえに知恵をめぐる競争も起こる。そのような競争は、核心においてきわめて政治的なものであろう。——この一般的論点自体を、ソフィストは否定することができないはずである。むしろ、そのような違いに基づく「統率者の資格」(170a11, b3 ἄρχοντας, b4 ἱκανῶν ἄρχειν) まで、ソフィストの側で積極的に主張したいという事情もあると思われる。きわだった知恵をもっているからこそ他人と違っている、とソフィストは自負しているのである。したがって、ここにプロタゴラス的言説をもってきて考察することもまた、プロタゴラス本人から後で「こじつけの批判であった」とは言われないような、適切な文脈におけるものであるはずである。

ゆえに、この (II) においてはプロタゴラスは、このような、太古からの知恵をめぐる事情という文脈の中で、それぞれ何らかの「知」の権益をもつわれわれと（この場合、きわめて実践的・実利的な）「思考課題」を共有しながら、いま、自分として、どのように知恵を誇り、どのように凡百の素人と違っているかを、かれの主義主張である「この言論」から、論じなければならない。このとき、同時に、プロタゴラスの側で「知恵は真の思考であり、無知は虚偽の判断である、と人々は考える」(170b8-9) ことに、どのように対処できるかが問題となる。人々ないし「われわれ」にとって、主張の競合という「きつい場面」に自ら直面するためのここでの真偽概念は、明確に、課題そのものの要求に従って、各個人への相対化という解釈が許されないものである。これに対するプロタゴラスは、社会的脈絡における自分の知恵の正体を積極的に明かして、自分の相対主義の「正当性」を訴えなければならない。それと同時に、この相対主義は、まさに「私的な相対的真理」の正当性を主内容とするものでなければならない。この状況において、相対主義者であるためにプロタゴラスがいかなる真理把握を選ぶことになるかについての、前節でふれたプロタゴラスのみの抱える問題が発生する。問題はおおむね、次の二つの場合分けによって示される。

(i) 人間はつねに真を判断している、とわれわれは主張する。(170c2-3)

(ii) 人間は時に真を判断し時に偽を判断する、とわれわれは主張する。(c3-4)

170c4-5 では、これら双方から、(ii) と実質的におなじ、「人々がつねに真を判断するわけではなく、[真と偽の]双方を判断すること」が帰結することになると予告される。これは、見かけ上プロタゴラスの主張に近いほうの (i) が、それをプロタゴラスに実際に言わせてみる後の観察において、その主張に付随する事実として逆の結果を生むという「自己

論駁的」帰結の予告である。ここでの (i) 自体も (ii) も、明らかに、個人に相対化されるのではない、「真」の絶対的用法において理解されている。そして、確かに絶対的用法における主張ならば、(i) は自己論駁的なのである。任意の X 氏が「人間はつねに真を判断している」と主張するそのときに、事実われわれ全員が、かれに反対の意見を述べるからである。この状況の解釈は(ii) によってのみ可能である。そして、ここから得られる教訓はただ一つであると思われる。すなわち、われわれを意見対立や葛藤のその場面に直面させないような真理にかかわる理論的言明は、そのことによってただちに、理論の資格をなくしてしまっている、ということである。たとえば真理論として「整合説」を採ろうが「対応説」を採ろうが、いずれにせよわれわれは、そのことをもって、激しい意見対立の場面で「或る仕方であるまえる」ようになることが期待されるだろう。私見では、ここでプラトンがソクラテスに予告的に述べさせる相対主義への疑念は、ほんとうにまじめに相対主義を採るときにわれわれは、むしろ葛藤場面でのふるまいかたが分からなくなるのではないか、というものである。実際、「プロタゴラスのもとにいた人々のだれかが、或いはあなた自身が、「だれも、他の人が無知であり、虚偽を判断する、とは考えない」と確言しようとするかどうか」(c6-8) および「しかし、万物の尺度は人間である、と語る言論は、まさにそのところに、必然的にいたらざるを得ないのです」(d1-2) は、教本や理論にしたがっての葛藤場面への直面でなくそこからの単なる逃避が、プロタゴラス説のまじめな受容において、実際に起こってしまうだろうという予測を述べるせりふである。

(Ⅲ) 後半の 170d-171a に進もう。ここから (Ⅱ) における予測を実証する議論が始まる。まず、プロタゴラスのもとにいた (cf.165a1-2) テオドロスが何らかの判断を下し、ソクラテスに向かって判断結果を語る、という事例を考える (170d4-5)。プロタゴラスの相対主義テーゼにしたがって、いま、

(a) テオドロスのこの判断は、テオドロスにとって真である

とすることができる (d5-6)。では、テオドロスならぬ他者のほうは、次の三つの可能性のうちどれか？ これが、ここからの議論にとっての固定的思考課題である。

(b-1) われわれはテオドロスの判断の判定者になれない。(d7)

(b-2) テオドロスはつねに真を判断する、とわれわれは判定する。(d7-8)

(b-3) 無数の反対者がテオドロスと争い、テオドロスは虚偽を思っていると考える。(d8-9)

テオドロス自身はこの三者択一に対し、(b-3)を自明な答えとする (e1-3)。この短い思考実験は、テオドロスを実験台とする、この課題に対する「われわれの立場」の確認でもある。この点に、対話者ソクラテスは注意深くアンダーラインを引いている。すなわちかれ

はこの立場を「では、どうでしょう？ あなたはそのとき、あなた自身にとって真を判断しているが、無数の者にとって虚偽を判断している、とわれわれは言ってみてはどうでしょう (βούλει λέγωμεν) ?」(e4-5)のように言って、定式化・固定化しようとしているのである。つまり、他人による真偽の評価という課題に対する「われわれ」の側の主張はおおよそ、

(b) テオドロスの判断は(少なくとも一部は)、テオドロスにとって真であり、かつ他の無数の人間にとって偽である。

のごときになる。ここで、もちろん、いまはわれわれの党派に属しているテオドロスによっても承認される、もとのプロタゴラス流の(a)は、プロタゴラスの主張からの一帰結ではあるのだが、それ自体、(b)とおなじ思考課題に直面したプロタゴラスがわれわれに対して曖昧さなく言う主張とはいえないだろう。テオドロスの判断がかれ以外の人間にとってどうかは、プロタゴラスのもともとの主張の設定の外なので、これについてどう考えるかは、一義的には決まらないように見えるからである。しかしそれと同時に、生きた、もっとも真剣なことばという先ほどの(I)の局面でプロタゴラスのことばを形容できた特徴は、ここではどうなっているか、考えることができるし、このように考えてみることは、プロタゴラス自身に対する完全に公平な議論という点からみて、有益である。(a)と(b)の両方の中に登場する「テオドロスにとって真である」という、このことばは、まず(b)においては、他人にとっての場合とのコントラストにおける使用なので、文句なく生きた使用を見ているといえるだろう。では、そうだと、次に(a)におけるおなじことばはどうか？ 先取りして言えば、私見ではこの点こそ、ここ以後のプラトンにとって、最大の問題点なのである。(a)は、臆見目に見ても、必要な解釈が施されていない、単なる生の素材のごときのものであろう。そしてその一方で、ここでの思考課題にてらしたときの解釈の可能な候補は、相変わらず、先ほどテオドロスがプロタゴラスの友人でありながら選んだ(b-3)を含む、(b-1) (b-2) (b-3)の三つしかないように思える。当然、友人ではなく本人ならば、この局面でどうするのだろうかということが、次の問題になるだろう。

(IV) この状況でソクラテスは、「では、プロタゴラス自身にとっては、どうでしょうか？ (Τί δὲ αὐτῷ Πρωταγόρα;)」(e7)と問う。これは文脈上、まず、いまの(b)の「われわれ」の主張に対するような、プロタゴラス側の同一水準における完全な見解、のことをさすように思える。このニュアンスではソクラテスのせりふは「対比」によって直前の問答とつながる。しかし同時に、ここではテオドロスを例示とする「だれかによる、何らかの内容の判断」のようなものではなく、まさにプロタゴラス自身の哲学説としての「人間が尺度である」という定まった判断が問題になり始める(e8以下)。この含みではソクラテスのこのせりふは、前の対話の(III)全体を「プロタゴラス氏の尺度説」という特

殊例に「適用したもの」ということができる。私見では、この二つは両方とも、議論自体が要求する接続関係である。プロタゴラス側では、相対主義というユニークな主張のために、われわれと対比される答え方、態度を示す必要がある。これが、「対比」のニュアンスを説明する。その一方で、テオドロスがその場において答えてくれるようには、すでにこの世にいないプロタゴラスは、答えてくれない。そして、以前の様々な批判に対して、きっとプロタゴラスなら「いい加減な批判をしないでくれ」と言ったに違いないというコメントが出た(166a以下)ので、それで現在の「厳密な批判」の局面になっているのである。このことが、証拠として次の世代に残された「尺度説」への対応という、一応別の場面への「移行」を行うということと、その新場面で(Ⅲ)の「適用」というかたちで考察を進めるということのほうを説明する。

プロタゴラス自身にかかわる話の主要部分が、「自己論駁の議論」に当たる。プロタゴラスの「人間が尺度である」という主張への関係者の態度に関しての標準的記述は、「プロタゴラスはこの通りだと思い、多数者はそれに同意しない」というものである(171a1-2)。この記述を承認する場合に関する二種類のコメントをソクラテスをつける。第一に、多数者は数的に優越するので多数者の言うとおりでであろう(171a2-3)。そして第二のものとして、はじめに問題とした「自己論駁の議論」がくる。次節で、ここまでに見た直近の文脈が与える重層的思考課題群にてらすならば、第一節では「虚偽論法」にすぎないものにみえた当該議論の、まったく別の見え方が可能になること、その見え方の変換を味わいつつ教訓を考えることを促すといった、複雑で、洗練された知的訓練として著者プラトンがこの一連の議論群を自覚的に提供したと思えること、以上二点を論じたい。

三

「自己論駁」のはじめのステップは次の内容の主張である。「かれ(プロタゴラス)のほうでは、すべての人々が有るものを判断する、と同意する(1)以上、自分の見解について、反対の判断者たちの、かれは虚偽を語っている、と考えるような見解(2-b)を、きっと、真であると容認する(3)でしょう」(171a6-9)。これについて、先の第一節においてわたしは、

- (1)プロタゴラスは、人間たちはつねに真を判断する、と考えている。
- (2)プロタゴラスは、(a)プロタゴラス自身にとっては、真を判断しているが、(b)他の無数の者たちにとって、虚偽を判断している。
- (3)(1)より、プロタゴラスは、(2-b)のようにプロタゴラスが虚偽を判断していると他人が判断するとき、この他人の判断が真である、と容認する。

のように、推論が見やすくなるように分節して、最終部分にはいかにもあやしい部分とし

て下線を引いてマークした。第二節の文脈読解から、この下線部の印象は、少なくとも部分的に、変わるように思われる。問題は、プロタゴラスの側で「真である、と容認する」部分を、プロタゴラス理論内部のテクニカルな真理概念（「他人にとって真である、と容認する」）の使用に基づいて解釈できるかどうかである。これはもちろん可能であるし、文脈がどうであれ、プロタゴラスはいつでもそのようにすることができる。しかし前節で見たここまでの文脈はわれわれに、その場合にプロタゴラスは、同時にかれの主張のレレバンスを申し立てる手段を、いっさい、失うと教えているように思われる。

(1)はプロタゴラス自身のことばからの直接帰結である。文脈的にはこのことばは、前節で見た(Ⅲ)の部分の三者択一(b-1)(b-2)(b-3)に相当する、プロタゴラス説にかかわる三択において、われわれの側に寝返り、こともあろうに(b-3)などを自明視したテオドロスとは違って、われわれに対抗して、プロタゴラスがいわば「正調」相対主義の

(b-2)「人はつねに真を判断する、とわたしは主張する」

のごときを口にする、という設定のもとで理解されるだろう。そしてその場合に、前節中の(Ⅱ)の部分の「自己論駁」の輪郭の予告にあった、(i)「人間はつねに真を判断する、とわれわれは主張する」からでさえ、これと相反する主張(ii)「人間は時に真を判断し時に偽を判断する、とわれわれは主張する」が帰結してしまう、という議論の第一歩が成就することになる。——こう理解されるのではない行動をプロタゴラスがとることは、不可能ではないが、難しいだろう。それだけでなく、どの程度難しいことかも、比較的容易に見て取ることができる。

まず第一にその場合、そもそもプロタゴラスがわれわれとおなじ思考課題を共有していたということを理解することも極度に難しくなる。ここで重大なのは、前節で重層的思考課題による拘束を得た

(a) テオドロスのこの判断は、テオドロスにとって真である。

が、そのような拘束のない時に比べて本来的に生きた意味、使用を見ているにもかかわらず、そこまでに特定された課題に対して「テオドロスにとって真」の部分が、対話的に、つまり彼我共通のことばやことばの意味の問題として、かつそのような共通のことばによって、さらに解明される必要があった、ということである。それ以上分解されない「Xにとっての真」を術語的に使用しようという意図が実現されるような何らの客観的条件もここにはまだ、存在していないのである。ゆえに、プロタゴラスが秘教的言説に逃げ込むとかたちで、他者との対話を自分の側から断ち切って、たとえば「人はつねに、<その人にとって真>であることを判断する、とわたしは主張する」と言うことは可能であるといっても、こう言うときプロタゴラスは、世間の中で理論的言明の力によって自ら自立的

に活動しているというその資格を主張する権限を、同時にはっきりと捨てることになると思われる。それだけでなくこのことは、ここまでの「共通」思考「課題」に基づく討議全体が、はじめからかれの「ポーズ」にすぎなかったという疑いを呼ぶようなふるまいであろう。

しかもこのような課題は、第二に、ソクラテス—プラトンの側で、理論の担い手にかかわる道徳的考慮から、プロタゴラスに「押しつけたもの」とは、とうてい言い難い。何度か指摘したように、この文脈は「わたしの言葉尻をとらえるな」とのプロタゴラスの（想定される）苦情に端を発している。この苦情中で「プロタゴラス」が、「徳の配慮を宣言しておいて、その者が、議論においてほかならず不正をしつづける」（167e2-3）と言うところが、ソクラテスをいわば「本気にさせてしまう」という設定になっている。そこまで言うのであればあなたの「趣旨」を、わたしの流儀で、ほんとうに徹底して追いかけるが、それでもいいのか、というソクラテスの側の基本態度が以後支配することになる。その流儀は基本的に「産婆的」なものなので（cf.148e-151d）、この態度自体は「押しつけ」ではない。趣旨の発見のために課題をみつけ、それに双方がそれぞれ答える、ということの繰り返しをしているだけなのに、プロタゴラスの側はそれに耐えられなくなる、という筋になっている。では、一方のソクラテスはどうか？ ソクラテスは、「自己論駁の議論」にさえプロタゴラスは納得しないだろうしまだまだ論争は続く、としながら「しかしわたしは、われわれは自分たち自身を、われわれがいまあるがままに用いざるを得ず、その都度思われることを語らざるを得ない（τὰ δοκοῦντα ἀεὶ ταῦτα λέγειν）と思うのです」（171d3-5）と、自分たちの議論方式の領分を守る発言をする。このせりふの「その都度」と「思われる」は、この文脈の中で、はっきりと生きた使用を見ており、わたしにはこのような言い回しは、著者プラトンがこっそり付け加えた「勝利宣言」でもあるように思われる。真理が「相対的な語り方」になじむ場面はむしろあるし、これは、プロタゴラスが大いに利用したい「証拠」であろう。しかし、それをほんとうに証拠とすることができ、実際に活用できるのは、相対主義ではなく、反相対主義の側なのである。なぜなら人に相対的にしか成り立たない事柄は、そうでない無数の「一致」を背景にしてはじめて、現実にわれわれが取り組むことができる対象になるはずだからである⁹⁾。課題から課題に進む過程で、そのような背景と前景を区別できない相対主義のような立場は、「自分のことばに引きこもる」というかたちで姿を消すだろう。他方の、最後まで課題を見とおした立場のほうでは、このような作業の結果を、自分の思いと他者の思いの、レベルにおいても内容においてもほんとうに適切な対照において、いわば、ことばがたったいま生まれたばかりのような、新鮮な意味合いにおいて、語るができるようになるのである。——おおむねこれが、目立たないようにテキストに残された、プラトンのメッセージであるように思われる。

⁹⁾これと似た発想が、たとえばD. Davidson, 'On the Very Idea of a Conceptual Scheme', in *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford 1984, pp.183-198 をも一貫して支配しているように思われる。

一方、議論の第一歩を認めつつ次のステップの不当性を訴えるという戦略をプロタゴラスが採用することも、不可能ではないが、著しく難しいように思われる。テキストでいえばこれは「それでは、もしかかれが虚偽を語っている、と考える人々の見解が真である、とかかれが同意するなら(3)、かれは、自分の見解が虚偽である、と容認することになる(4)のではありませんか？」——「そうせざるをえません」(171b1-3)にあらわれる、決定的段階にかかわる。もういちど第一節の「推論」の、後半部のかたちを書いておこう。

(3) (1)より、プロタゴラスは、(2-b)のようにプロタゴラスが虚偽を判断していると他人が判断するとき、この他人の判断が真である、と容認する。

(4) (3)より、プロタゴラスは、自分の見解が虚偽である、と容認する。ゆえに(2-a)は棄却される。

(5) (2-b)および(4)より、プロタゴラスは、かれ自身を含むだれにとっても、虚偽を判断している⁽¹⁰⁾。

(4)への移行をとにかく阻止するために、「真」の相対主義的術語用法を申し立てにくい場合でもプロタゴラスには、対象レベルとメタレベルの違いに訴えるという方法がありそうに思える。すなわちかれは、一方ですべての真偽の「現象」に関しては、自分であれ他人であれ人の言うがままに真であると「極度にリベラルに」承認しておいて、しかし他方で真理の「意味」にかかわる唯一のメタレベルのものとしての自分の尺度説そのものは、他人がどういおうと、絶対的に真理であるものとして、虚偽の余地のないものと「最高度に頑固に」言い張ることが、できそうに思えるのである⁽¹¹⁾。——これも、不可能ではないだろう。しかし同時に、この文脈に入っているかぎりでのプロタゴラスには、この選択は難しいだろう。なぜならこれ以前の議論で示された思考課題の連鎖は、あらかじめどのレベルに主張があるかの腑分けをするという、事前の予備作業を承認することができるような、知の何らかの「既存システム」を予想する「文明開化」された議論場面ではなく、きわめてワイルドに、まず知恵の存在のみを認め(!)、「知恵の社会的需要」にどう答えられるかという方法を、各流派で申し立てることから始まっていたからである。このことから始まったプロタゴラスと「われわれ」の対話的な課題設定と課題への対応の競い合いにお

⁽¹⁰⁾ここに当たるテキストは「反対のことを語る人に、その人は真を判断している、とかかれが認めるとき、そのときにはプロタゴラス自身もまた、犬も、任意の人間も、自分が学んでいないことについては、何一つについても尺度ではない、と同意することになるのです。」(171b11-c3)のように、知恵と無知の対比をつける170a-bの元の文脈に言及するものであり、趣旨の考察のために相対主義をその反対者と対話させる、この辺りの議論の厳密な評価の仕方を示唆している。

⁽¹¹⁾ゆえにこの応接は、ある意味では近代的相対主義の根本特徴としての「相対性と絶対性の反転」(入不二基義『相対主義の極北』(春秋社、2001年)8-12頁参照)にまで連なるものとなる。このときプラトンの側から可能な挑発は、相対主義に近いタイプの近代的哲学ならば、『テアイテトス』の提出する「各自が自分の主張のレレバンスを積極的に訴えるべき対話状況」に相当するものにおいて、一貫して適切にふるまえるだろうか、というものになるだろう。

いて、「われわれ」のほうの行っていたことは、しだいに、「真」「偽」に関する前理論的で現象学的な予備考察という色彩を帯びるようになってきている⁽¹²⁾。これは、テオドロスが他者の判断の真偽評価について「証言」してくれる場面で、一種のクライマックスを迎える、とわたしは考える。このようなノーマルな「現象」「あらわれ」に明示的に反するようにして、「メタレベル」の主張を繰り出すという「手」は、ほんとうに許容されている手というより、「やけっぱち」「純然たる政治的暴力」のようなものとしてのみ、可能なのである。

「レベル差」に関するこの点は、「自己論駁」というネーミングが、もともと幸福なものではなかったということを知っている。ここにあるのは、ことばや考え方がそのシステムにおいて「自分から」転ぶという議論ではなく、ことばや考えをもつ生身の論者が適切な状況下で相応の前提をもった場合、何に荷担していくか、という観点を含んだ議論である。個人はレベル差にかかわらず或ることを真と判断したり偽と判断したりする。そしてそれだけである。文脈から「自己論駁」を切り離す伝統的解釈は、議論の性格自体を誤解している。もともと「かれのことばからだけということにして、他人の証言を用いずに、できるだけ手短かに同意を得ましょう」（169e7-170a1）などのテキストのことばも、よく読めば伝統的解釈を、けっして支持しないのである⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。

⁽¹²⁾この点は重要であると思われる。「自己論駁」を含むこの一連の箇所は、『テアイテトス』の中でも、基本的に「知識」「知恵」「真」「偽」について何を押さえておくべきかをプラトンが語り始める、根本テキストであるとわたしは考える。この点については、ちくま学芸文庫『テアイテトス』の299-329頁に付したわたしの「訳者解説」をも参照されたい。たとえばわれわれは知識や真理を、「学校で先生から習うもの」と考えがちだが、学校がないときにも知識はあったし真理もあった。われわれはまた、知識や真理は文字によって書かれているとか、何らか定型的情報であると発想しがちだが、書き言葉がないときにも知識はあったし、真理も虚偽もあった。数十年や数百年オーダーの、知識の単に「付带的」な特徴に欺かれてはならない。そして付帯性の組織的排除は、プラトンがここで試みるような太古からの脈絡の現象学をも活用しなければ、不可能に思えるのである。

⁽¹³⁾以上の解釈が基本的に説得的なら、『テアイテトス』第一部全体の「タイトルの議論」と目される151d-152cの議論の意義も別の様相を呈することになる。知覚が知識であるという定義を答えたテアイテトスは、プロタゴラスに似た主張があることから、おなじ風が吹くときにある人は寒がり、ある人は寒がらないという事実へのかれ自身の対応を迫られ、風がそれ自体において、冷たくも、冷たなくもなく、「プロタゴラスのいうことに納得して」（152b7-8）

(X)「寒がっている者にとっては冷たく、寒がらない者にとっては冷たくない」

と考える、という選択をする（152b2-9）。小論で見た169d-171dの議論から、たとえXを選択したとしても、それは、直ちには相対主義への屈服を意味せず、冷たいものと冷たくないものが分かれる多数事例を背景にこのようなボーダーラインケースないし「ノーマルではない」ようなケース（むしろこの類いのケースにおいて客観的区別が「客観的に成り立たない」ことにも、さらに多様な客観的原因、客観事情がありうる）を解釈する、という反相対主義的戦略の採用を、まだ、許容していたことになる。（Xの拒否をするなら、逆に、ウルトラ客観主義に与して、「冷たい」が感じ方の問題であるという基本から逸脱することになってしまう。実感される冷たさが冷たさであり、温度を測るなどのことは「その後のこと」なので、温度等により全ケースで冷たさを決めるとすれば、倒錯でしかない。しかし、われわれはそもそもの「冷たさの体験」において、体験する同類項の人間の同型性、事実的一致を背景にして初めて「体験」

しえたのではないだろうか)

また以上の解釈に随伴することとして、『テアイテトス』第一部を貫くプラトンの「思考の代数学」の基本設定は、たとえば M. F. Burnyeat, *The Theaetetus of Plato, with a Translation of Plato's Theaetetus by M. J. Levett, Indianapolis 1990, pp.7-10* が明言的に想定するような、人称性を欠く(疑似)推論の連鎖というより、結果しだいで場合により当事者が救済されることにも没落することにもなる、ペルソナがからむ演劇・対話的なものであった可能性が強いと思う。この点の展開は今後を期したい。

⁽¹⁴⁾本稿は2005年9月10日・11日開催された第9回「ギリシャ哲学セミナー」(東洋大学)第一日(9月10日)のために使用した同名の発表原稿に、質疑応答の成果を活かすべく、手直しをしたものである。司会の労をとられた金子善彦氏はじめ、ご質問、ご意見をお寄せいただいた多くの方々に、感謝申し上げます。発表原稿では第一節で自己論駁は不成立だという書き方をしてしまっていて、「自己論駁」はわたしの解釈ではけっきょく成立しているのか、していないのかという質問が、複数の方から寄せられた。当然考慮に入れるべき対話的な縛りを考慮に入れるならば成立している、という方針に一義的に決めることができた。その他の点でも大いに改善できたと思う。ただし著者の不徳に帰されるべき残る過ちも、むろん、まだあることだろう。